

小川 進 著

『世界標準研究を発信した日本人経営学者たち
—日本経営学革新史 1976-2000 年—』

今井 希

大阪公立大学准教授

(1) はじめに

本書は、「世界標準研究」と呼ぶ、経営学において世界的に影響のある研究が生み出された過程を、その研究を発表した研究者と彼らを取りまく研究コミュニティの動静に焦点を当てて描いたものである。

近年、質の高い論文を書くための議論は様々な学会や学術雑誌上で行われ、研究の方法論に関する教科書や論文も数多く刊行されている。これらの文献では、研究テーマの決め方や研究の順序や手続き、論文や報告書でのまとめ方が整理された形で記述されており、これから研究を始めようとする読者にとって良い手引きとなっているものも多くある。一方で、これらの文献では、研究を行う中での試行錯誤のプロセスや、研究を行うことそのものの面白さについて具体的に記述されることはほとんどない。

これに対して本書では、主に日本人経営学者によって発表された世界的に影響のある研究を対象として、研究方法論に関する教科書や論文では「試行錯誤」という言葉だけでまとめられてしまいがちなプロセスに焦点を当て、それを詳細かつ多面的に描写している。本書は研究者が行ってきた試行錯誤の内実をうかがい知ることができると同時に、研究を行うことそのものの面白さが伝わる内容となっており、大学院生や若手研究者のような、これから研究を始めようとする読者、ならびに世界的に影響のある

研究を行いたいと考えている読者にとって特に意義を持つ文献だといえる。

以下では、本書の内容を紹介し、本書の特色とその意義について述べる。

(2) 本書の概要

本書は、序章、第1章から第4章および結章の6章で構成されており、総頁数は228頁である。序章では本書の目的とその背景となる問題意識が示され、その後、日本人経営学者が発表した世界的に影響のある研究として、見えざる資産を中核概念とした経営戦略論(第1章)、知識創造理論(第2章)、自動車産業の製品開発能力(第3章)、リーン製品開発とマルチプロジェクト戦略(第4章)が中心に取り上げられ、これらの研究がいかに進められてきたのかが記述される。各章は、公刊資料に加え、筆者が各研究を公表した研究者ならびにその関係者たちに対して約20年間にわたり行ってきたインタビューに基づいて描かれている。続く結章では、ここまでの章の総括が行われるが、その後、著者のMITにおける指導教員であるエリック・フォン・ヒッペルが行ったユーザーイノベーションに関する一連の研究について、これまでの章と同様のアプローチで記述される。以下では本書の内容を紹介するが、序章について詳しく取り上げ本書の問題意識と目的を示し、ストーリーの記述が中心となる第1章以降につ

いては、各章の記述の特徴を中心に紹介する。

序章では、まず現在の大学での研究者を取り巻く状況として、大学における研究者の評価や評価機関による大学の研究能力評価の際、高ランクの雑誌への掲載本数や論文の被引用回数を重視するようになったことが述べられる。この状況下で若手研究者は「よい論文」や「質の高い論文」という基準を常に意識し、その基準と自分の研究活動とのギャップをいかに埋めるかに苦心しながら研究しているように見えると指摘する。

この若手研究者の研究活動に対し、著者は、経営学の研究は「研究活動全般の中で知的興奮を味わわせてくれる」ものであり、これは被引用回数の多い研究でも同様であることを、野中郁次郎とのエピソードを交えて示す。世界的に影響力のある研究を行った本人からその研究の成り立ちについて聞くことは、経営学の研究を行うことの難しさや楽しさ感じさせてくれるものだが、現在のところ、被引用回数の多い研究を行った人物やその研究の過程について詳しく紹介する文献はほとんどない。これが、本書の問題意識となる。この問題意識を踏まえ、「影響力ある研究を実際に発表した人物やその関係者の人々を直接取材し中心人物が研究人生を始めたところまで遡り、試行錯誤の過程を経て対象とする研究が発表されるまでを物語として再構成」することが、本書の目的として示される。その後、序章の最後に、本書で取り上げた4つの研究の選定過程が示される。

第1章では、1987年に出版された *Mobilizing Invisible Assets* において展開された、「見えざる資産」を鍵概念とした経営戦略論の生み出された過程が、著者である伊丹敬之の行動を中心に記述される。本章で「知的に高いエネルギーを持つ仲間に反応して研究テーマを決める」と表現される伊丹は、人々との関わりの中で、オペレーションズ・リサーチ、管理会計、経営戦略論とテーマを変えながら研究を進めた。その中で、吉原英樹らと行った日本企業の多角

化戦略に関する研究プロジェクトの中で情報的経営資源という概念が生み出され、この概念を中核概念として執筆した経営戦略論の書籍が英語に翻訳され、世界的業績となった。

第2章では、世界的業績である著書 *Knowledge-Creating Company* を竹内弘高とともに発表した野中郁次郎の研究の過程が記述される。本章では、野中の研究スタイルについて「優秀な相手を見つけて協力し、難局を突破する」と表現されている。野中は米国で博士号を取得し日本に帰国するが、そこで奥村昭博、加護野忠男らと研究プロジェクトを組み、日米企業の経営比較を行った。その後、竹内弘高をプロジェクトのメンバーに加え企業の自己革新に関する事例研究を重ねた。この研究の中で野中は情報創造という概念を用いたが、この概念が礎となり、その後、知識創造理論が展開されることとなった。

第3章では、*Product Development Performance* をキム・クラークとともに発表し世界的に高い評価を受けた藤本隆宏を主人公に、彼の研究の過程が記述される。三菱総研で自動車業界の専門家となっていた藤本は、ウィリアム・アバナシーやキム・クラークが立ち上げていた自動車業界の製品開発調査を行う研究プロジェクトの重要なメンバーとなっていた。クラークとともに入手困難な世界の主要自動車メーカーの新車開発プロジェクトに関するデータを収集することに成功した藤本は、重量級プロダクトマネジャーという概念を生み出しこの概念を用いて収集したデータ分析することで、高い成果を上げる自動車メーカーの製品開発における組織的な特徴を明らかにした。

第4章は、ジェフリー・ダイヤーとの共著論文“*Creating and Managing a High-Performance Knowledge-Sharing Network*”で世界的な評価を得た延岡健太郎を中心に、青島矢一、武石彰の3名の研究者が取り上げられる。延岡はMITの国際自動車研究プログラムであるIMVPのメンバーとしてマイケル・ク

スマノと共に製品開発管理の研究を行ったが、IMVPの会合をきっかけにダイヤーと自動車業界の組織間関係の共同研究を始め、その成果の一つが経営戦略論のトップジャーナルに掲載された。本章で登場する3名は、クスマノとの共同研究をはじめ、IMVPから様々な面でサポートを受けながら研究を行っていた。3名が行ってきた研究過程の記述は、若手研究者の孵卵器としてのIMVPの役割の描写でもある。

最後に結章であるが、本章は2つのパートに分けられる。最初のパートはここまでの総括であり、各章の概要が示された後、研究方法、研究体制、研究発表方法の点から本書で取り上げた研究の進め方の新しさが述べられる。この中で、世界標準研究のような研究者一人では成し難い研究を行う上で、共同研究を行う研究者間での尊敬の念や友情といった心的なつながりの重要性が強調される。

次のパートでは、エリック・フォン・ヒッペルが行ってきたユーザーイノベーションに関する一連の研究の過程が記述される。ここではフォン・ヒッペルが大学院生や客員研究員と共に研究を進め新たな研究分野を形成する過程が記述されているが、その中で示されるコミュニティによるイノベーションは、本書の内容の概念的な総括にもなっている。

(3) 本書の特色とその意義

本書は、既存の研究方法論に関する文献に対し、特に研究活動の捉え方について、以下の2点の特色がある。

1点目は、本書において研究活動が「複数の研究からなる一連のもの」と捉えられその成り立ちが記述されている点である。研究の方法に関する文献では、一般的にひとまとまりの研究が想定され、その研究の進め方が検討されている。これに対し、本書ではある研究が具体的な成果には結びつかなかったとしても、その研究を行う中で得られた着想が次に行う研究の礎となる場合や、ある研究の中で導出された概念が

その後の研究で発展的に展開される場合など、複数の研究が一連のものとなっていく様子が具体的に描かれている。

2点目は、本書では研究活動がバックグラウンドの異なる複数の研究者によって行われるものとして描かれている点である。経営学研究の多くが共同研究の成果として発表されているが、研究が共同で行われるものというのを踏まえた上で書かれた研究の方法に関する文献は多くはない。これに対して本書では、各章の主人公のみならず、彼らと共同研究を行う研究者に対しても、そのバックグラウンドや研究関心について調査を通じて明らかにしている。その上で互いに影響を与え合いながら新たな知見を生み出していく共同研究の創造的側面だけでなく、研究者間の利害の調整や研究関心の移行に伴う共同研究の解消といった側面を含めた共同研究のプロセスを描いている。

このような特色は、冒頭に述べたように、なにより本書が主要な読者として想定している大学院生や若手研究者にとって意義のあるものとなるだろう。また近年、上林他(2021)や沼上編(2022)、西村友幸と加藤敬太が発表してきた一連の業績のように、日本の経営学研究において経験的研究を行い始めた世代の研究の足跡を辿る取り組みが行われている。本書における研究活動の記述はこれら文献の内容と補完的であり、これらの取り組みに対しても意義を持つものであるといえる。

【参考文献】

- 上林憲雄・清水泰洋・平野恭平編(2021)『経営学の開拓者たち—神戸大学経営学部の軌跡と挑戦—』中央経済社。
経営学史学会監修・沼上幹編著(2022)『学史から学ぶ経営戦略』文眞堂。

(白桃書房, 2021年3月, viii+220頁, 2,364円+税)

